

「大学進学はもう無理かな……」。昨年の夏、宮城県気仙沼市の気仙沼高3年、尾形直樹さん(18)は、心が折れそうになっていた。

震災前は、漠然と都内の大学進学を希望していた。しかし、震災で状況が一変。父は建設業を営んでいたが、被災地の経済は停滞し、何か月も収入ゼロの苦しい状況が続き、進学のことはいよいよ出しくなかった。

所属していた野球部では、捕手でレギュラー。しかし、震災で満身に練習できなかった。チーム状態が上がらないまま県予選に臨み、結果は3回戦で敗退。甲子園出場の夢は断たれ、尾形さんの夏は終わった。

悔しい思いを引きずったまま勉強を始めた昨年8月下旬、学校の掲示板で見つけたのが、世田谷区のNPO法人「海の会」のポスターだった。首都圏の大学に進学を希望する被災地の若者を物心両面からサポート

「復興の力に」進学決意

する同会。ポスターは支援対象となる学生を募集する内容だった。立ち止まらず、前へ進むための手がかりを見つけた気がした。

* *

「東北育ちの私にできる、せめてもの恩返しなんです」。東北大OBらで結成した「海の会」代表、飯沼一元さん(69)(世田谷区)は、設立の趣旨をそう語る。

震災後、経済的な事情で、大学進学などの夢をあきらめる被災地の若者たちの姿に胸を痛めていた。飯沼さんは、同じ東北大出身の同

世代の仲間「自分たちで若者を育ててみないか」と呼びかけた。

支援する学生は、書類選考、面接を経て選出する。現在の会員数は23人。集めた寄付金を元に、学生の学費などとして、月数万円を支給する仕組みだ。

尾形さんの面接が行われたのは先月中旬。まだ進学先は決まっていなかった。

「大学卒業後は故郷に戻り、父の会社を継ぎたいんです」。前を見据えて語るその姿に、飯沼さんは即座に支援することを決めた。

父「てっぺん見てこい」

息子「卒業後、会社継ぐ」



大学進学が決まった尾形直樹さん(左)と父の正光さん(5日、宮城県気仙沼市で) | 河村武志撮影

「海の会」の飯沼さん(墨田区で)



* *

「金なら何とかなるから」。尾形さんの父、正光さん(54)も背中を押してくれた。「一度は東京に出て、日本の『てっぺん』を見てこい」。そう励まされた。

父の会社を継ぐと思っただのは震災後。父が手がけた鉄筋コンクリート造りの注文住宅は、津波で壊滅的な被害を受けた同県南三陸町でも流されずに残っていた。その光景を目の当たり

被災地の学生支援に奔走

にして、父のことを「心からすごい」と思うようになった。

進路もそれで決まった。経営の基礎を学び、父の会社を大きくしたい。受験本番まで1日5時間以上の猛勉強を自分に課した。

* *

先月下旬、尾形さんは第一志望だった東洋大経営学部合格した。「進学させてもらえるだけで本当に感謝しています。今の気持ちを忘れず、一日一日を大切に過ごしたい」。気仙沼市の自宅でそう語る尾形さんの傍らで、「きっと大きくなって戻ってきてくれるはず」と正光さんが笑う。

まもなく上京し、都内で一人暮らしを始めるが、郷里のことは忘れない。「震災をきっかけに、家族の大切さを感じるようになった」。大学を卒業する4年後、気仙沼に戻り、父と一緒に復興の力になるよう決めている。



正光さんが建て、津波に耐えた鉄筋コンクリートの宮城県南三陸町の住宅(尾形さん提供)